The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	渡来系文物からみた伽耶と倭における政治的変動
Author(s)	朴, 天秀
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1995, 29, p. 53-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48027
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

渡来系文物からみた
伽耶と倭における政治的変動

朴　　天秀

1　渡来系文物に関する先行研究の検討と本稿の目的

（1）　渡来系文物に関する諸見解

東アジア世界の東辺に位置する倭が、東アジア世界の政治社会に本格的に登場したのは、古墳時代のことである。この時期の倭には朝鮮半島からの文物が大量に流入した。その背景をめぐっては、様々の解釈がなされてきた。

江上波夫は古墳時代を前期（4世紀）と後期（5―6世紀）の二期に分け、前期の古墳はその副葬品に鏡・玉・剣・石製腕飾類など弥生時代以来の文化要素を数多く保有し、呪術的・宗教的な色彩が濃いことから、その文化の推移は弥生時代からの内在発展の結果として理解した。一方、後期になると、古墳の規模が拡大するとともに、実用的で華麗な武具・馬具・装身具などが副葬品に多く含まれる、と捉えた。そして、このような様相は、前期からの系譜で追うことが出来ないとし、中央アジアを起源とする騎馬民族文化との共通性を強調し、この文化は朝鮮半島に拠点をおいた騎馬民族の征服によって形成されたと主張した（江上1967）。

また、金錫享も、倭の国家形成は外来の勢力による征服によってなしとげられたと捉え、朝鮮半島の三韓・三国が倭に分国を設置したことによって、倭の文明化が行われたと主張した（金錫享1969）。このように、一方

的な文化伝播を強調する傾向は、韓国の研究者の間でも共通している。

一方、日本の研究者の多くは、5世紀代の倭の文明化と古代国家成立の背景を、大和政権による任那経営あるいは大規模的な朝鮮侵略に求めている。

たとえば、小野山節は、『世界考古学大系』日本3の馬具と乗馬の風習の項目に「半島経営の盛衰」という副題を付けながら馬具と乗馬の風習の導入の背景を半島経営の所産と理解した。そのなかで、小野山は、江上の騎馬民族征服王朝説と金錫享の三韓・三国日本分国論の根底にある侵略仮説について批判しながら、政治的統一を完成していない倭による朝鮮半島への侵略はありえないという江上・金錫享の考えを反駁し、統一国家の成立以前にも海外侵略を起こした例をあげ、倭の朝鮮半島への侵略を渡来文物の導入の背景と考えた（小野山1975)。

最近、韓日の考古資料の比較検討の研究が進み、倭の古墳時代中期の渡来文物の主流は、伽耶の地に求められることが明らかになりつつある。逆に、この時期の伽耶地域においても、多数の倭系文物の存在が認められ、注目されてきている。

すでに、倭系文物は戦前から日本人研究者によって注目されてきた。日帝が韓国を侵略した直後、朝鮮半島全域を調査するなかで焦点になったのは、南部の慶尚道地域であり、その目的は『日本書紀』に書かれている任那日本府の遺跡を発見し、半島の支配を正当化するためであった。しかしながら、期待されたような任那日本府の存在を証明する遺跡の発見には成功せず、ただ咸安の末山里34（現4）号墳の鹿角製直弧文刀装具など若干の倭系文物を確認しただけであった。

その後、穴沢咏光・馬目順一は、小倉コレクションの伝釜山蓮山洞出土の鋲留眉庇付冑・三角板鋲留短甲、および咸陽上栢里墳墓群出土の三角板鋲留短甲が倭のものとほとんど違いがないことを強調した後、次のように

その搬入の背景について述べた。これらの甲冑は、末山里34号墳の鹿角製直弧文刀装具などと共に当時の新羅・百済の勢力圏の中心から離れた所で分布しているので、当時の倭の影響力の浸透範囲を示すものであり、また、これらの甲冑は任那日本府に関する論議の重要な考古学的な資料であることを強調した（穴沢・馬目1975）。

（2）　本稿の目的

ここでは、まず、これまでみてきた研究史を検討しながら本稿の視角を明らかにしたい。

江上の騎馬民族征服王朝説と金錫享の三韓・三国日本分国論の根底にあるものは、小野山が指摘したとおり特定の遺物と民族または人種とを結び付けて理解し、ものの移動を民族の移動にあてはめる考え方であり、その理論的な枠組みに問題が存在する。また、ほぼ同じ時期の伽耶地域には江上が弥生時代の文化要素を保有したと考えた呪術的・宗教的な巴形銅器、筒形銅器、紡錘車形石製品、鏃形石製品、玉杖などの倭系文物が流入することも注目される。これらの倭系文物の存在は、ものの流れが騎馬民族征服王朝説と三韓・三国日本分国論でいう一方通行的なことではなく、ある程度相互的であったことを示している。

このように両説はその実証的な面と理論的枠組みの両側において成立しない伝播主義的な発想としか考えられない。それぞれの内容は異なるが、以上のような伝播主義的枠組みはもはや世界の各地から、それ以上受け入れられないことが明らかになっている[1)]。

また、日本の研究者の多くは、5世紀代の倭の文明化と古代国家形成の背景を、大和政権による任那経営あるいは大規模的な朝鮮侵略に求めてきたが、その考えのもとには『日本書紀』のいわゆる任那日本府の存在や広開土王碑にみる倭人の侵略記事が存在する。最近、この考えのもとになっ

た大和政権による任那支配の「不動の事実」という枠組みがすでに崩れたし、広開土王碑にみる倭人の侵略記事についても再解釈が行われている。しかし、なによりも問題なのは物質文化の変化を考古学的な方法で考古学的な脈絡のなかで説明しようとせず、安易に文献資料に合わせて解釈したことである。

これまで研究史を検討した結果、古墳時代中期の倭における伽耶系文物と伽耶地域における倭系遺物の出現背景について、韓国側の一方的な文化伝播の強調と日本側の侵略史観による文化略奪の主張があり、両方とも現在の民族と国家意識に基づいた生産的でない論争が繰り返し行われてきた。このような両方の枠組みは事実関係の検討のみで打破されることではなく、事実をよりよく説明できる新しい枠組みの提示によって代わるべきである。

筆者は古墳時代中期における伽耶と倭の歴史的展開をいままでのように一方の立場や論理で説明するのではなく両地域間の交流による相互作用という視点で再検討したい。

伽耶・倭の相互作用の面で注目したいのは、5世紀後葉の雄略朝の倭における全列島規模の政治的変動が、同時期における伽耶の政治的中核が金官伽耶から大伽耶への移動する政治的変化と関連することである。また、5世紀前葉の河内政権の成立にともなう倭における全列島規模の政治的変動が伽耶地域との関わりをもつ可能性がある点である。この二つの時期には、伽耶から倭に文物および工人が渡来するのと同じく、逆に倭から伽耶に文物と人が流入する。

本研究では、古墳時代の中期を大きく二つに分けて、4世紀後葉—5世紀前葉を中期の前半、5世紀中葉—後葉をその後半と設定し、両時期におけるそれぞれの陶質土器・須恵器・鉄鋌・馬具・装身具・武器・武具などの渡来系文物と工人の系譜とその流入のありかたについて検討する。それと同時に、伽耶における倭系文物である土師器・巴形銅器・筒形銅器・石

製品・甲冑・鏡などの流入のありかたを明らかにし、両者の比較検討を行う。このような分析を通してここでは伽耶および倭における政治的変動の過程を次の二つの課題に絞って考察したい。

第一に、これまで内的な側面から議論されてきた伽耶における政治的中核の形成とその移動の問題を外的な側面から明らかにすることである。

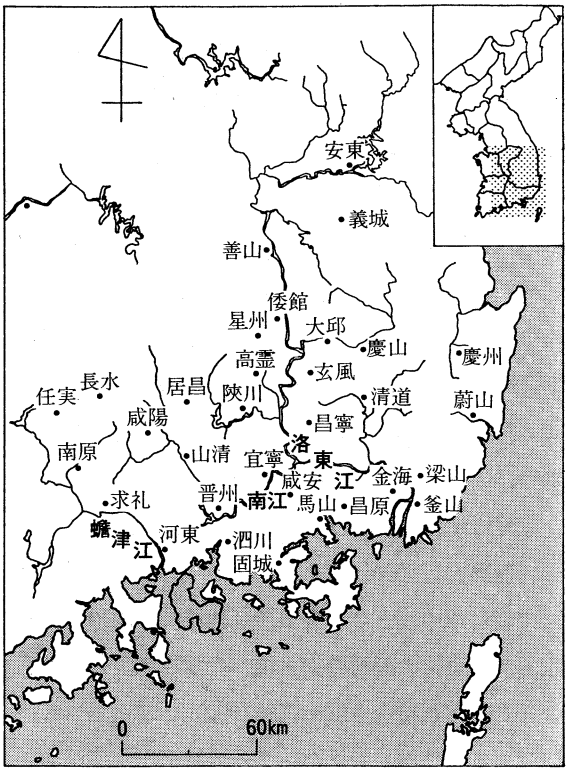


図1　韓国東南部地域地図

第二に、これまで内的な問題として取り扱ってきた古墳時代中期における倭の政治的変動の問題をその外的契機に焦点をあてて検討することである。

2　古墳時代中期の渡来系文物における二つの波

ここでは倭における渡来系文物の系譜とその導入のありかたについて検討するが、紙幅の関係上、本稿の論を展開する上に必要な要点を述べることとし、その詳細は別稿にゆずることにしたい。

（1） 陶質土器・須恵器

まず、土器に最も敏感に現われる地域性を手掛かりに、初期須恵器と陶質土器の系譜を追求し、当時の伽耶・倭における政治的交渉にたずさわった集団を明らかにしよう。

倭における初現期の須恵器工人の出自について、出現期の窯跡である大阪府大庭寺遺跡の灰原のＴＧ231・ＴＧ232資料を中心に韓国出土の土器と比較しながらみてみよう。かつて、筆者はＴＧ231・ＴＧ232の資料のなかにこれまで最古型式と認められてきたＴＫ73型式より先行する一群の須恵器の存在と、またそれらの須恵器における系譜差と型式差を明らかにしたことがある（朴1993)。 大庭寺遺跡出土須恵器の器種は、高杯、把手付椀、器台、大甕などで構成されている。

大庭寺遺跡の高杯は大きく脚部透孔の形態によって三角形、円形、長方形、菱形として分類できる。そのなかで三角形のものは趙榮済の研究によって晋州を中心とする慶南西部地域から馬山・昌原地域までの分布圏が設定され、また大阪府野中古墳、大阪府久宝寺遺跡、兵庫県砂部遺跡などでのその存在が指摘された（趙1990)。

円形のものは咸安を中心とする地域に出土例がある。長方形で多数の透孔をもつものと菱形のものは嶺南地域に広く分布しているので特定できないが、馬山・昌原地域にこれらの類型のものが存在することのほか、高杯の類型がこの両地域に主に存在する脈絡から馬山・昌原地域にその系譜を求めたい。

また、大庭寺遺跡の把手付椀には無文のものと波状文をもつものがともに存在するが、両者の違いは時期差と考えられる。このなかで波状文をもつものは、その全体形態と文様の施文手法が馬山縣洞墳墓群出土品と類似するので馬山・昌原地域にその系譜を求めることができる。

筒形器台は釜山の華明洞７号墓出土品に、高杯形器台は、福泉洞11号墓

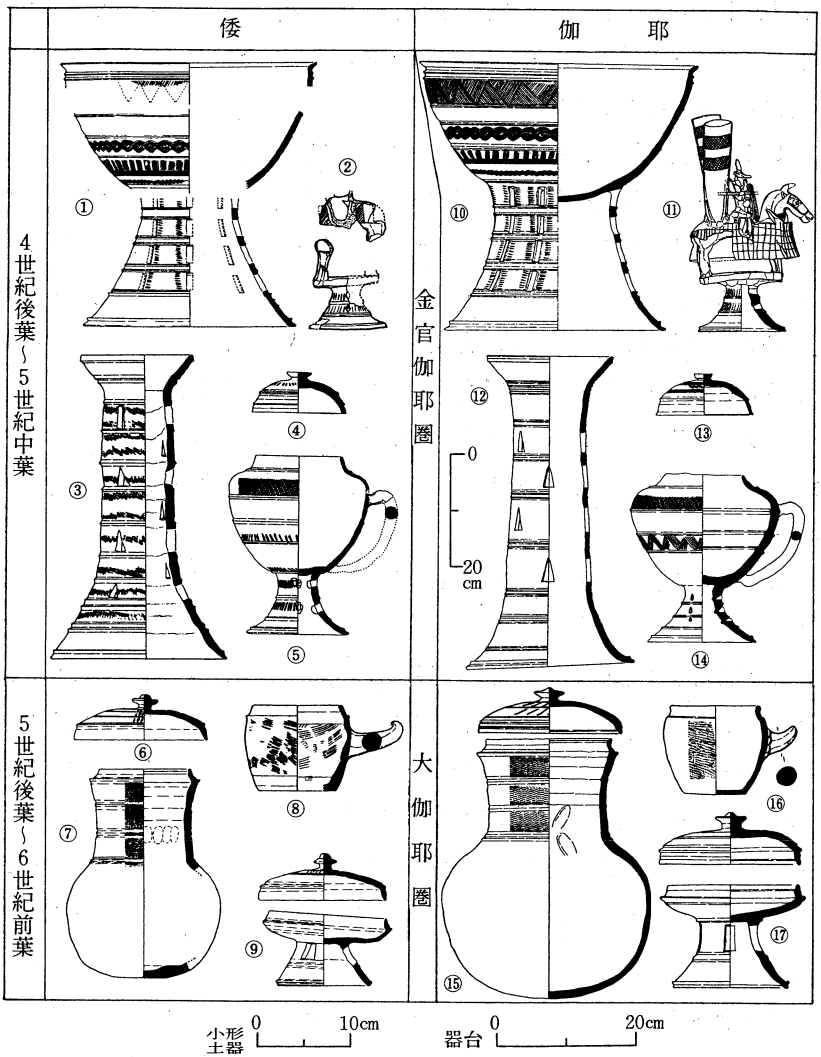
出土資料に類似するものがある。また、ほかの高杯形器台の身部に施文された波状文・三角鋸歯文・組紐文とその組み合わせは釜山・金海地域の器台にみられる要素である。

以上の検討の結果、大庭寺遺跡出土の初期須恵器は、大きく分けて大形品は釜山・金海地域に小形品は馬山・昌原、咸安、慶南西部地域に出自を持つ工人によってそれぞれ製作された可能性が極めて高い。これらの地域のなかで主に首長墓で使われる大形品の器台類の製作に携わった釜山・金海地域の工人の中心的な役割が想定できる。すなわち、これらの須恵器の工人は、釜山・金海地域の工人集団の引率下に複数の工人集団が渡来したと考えられる。また、これらの工人は、大庭寺遺跡出土の初期須恵器にみる明らかな時期差などから一定の時期に渡って継続的に渡来したと判断される。

次に韓国からの搬入品と考えられる陶質土器の系譜について器種別に見てみよう。

高坏形器台：岸和田市久米田古墳群の方墳出土品は、その身部の組紐文、集線文、波状文の組み合わせと、脚部の横位の櫛歯文を縦列に施文する点などその細部にいたるまで釜山福泉洞31号墳出土品に類似するのが注目される。久米田古墳群の方墳出土品は蛍光X線分析によって明らかに陶邑製品ではないことが判明したので釜山福泉洞31号墳出土品とともに同一流派の工人によって釜山地域で製作された可能性が極めて高い（三辻・虎間1994）。

把手付短頸壺：岐阜県遊塚古墳出土の把手付短頸壺の蓋は、早くから釜山華明洞7号墓出土品との類似性が指摘されてきた（申敬澈1983）。広島県砂走遺跡出土品（新谷1993）は、身部にみえる組紐文が釜山地域で器台に使われた文様であるので、その地域で製作された可能性が考えられる。福岡県三雲6号住居出土品と広島県池の内3号墳出土品は、身部に斜格子



①岸和田久米田方墳　②奈良南山４号墳　③大阪大庭寺　④岐阜遊塚古墳
⑤広島池の内３号墳　⑥―⑦米原入江内湖　⑧大阪上町　⑨朝倉村中央公民館
⑩釜山福泉洞31号墳　⑪伝金海　⑫―⑬釜山華明洞７号墓　⑭昌原道渓洞15号墓
⑮咸陽白川里１号墳　⑯陜川中磻渓７号墓　⑰陜川玉田85号墓

図２　倭の初期須恵器と陶質土器の系譜とその変遷

文を施文する点が昌原道渓洞15号墓出土品と一致するのでその地域からもたらされたと判断される。大阪府野中古墳出土品のなかで身部に斜格子文を施文した3点も同じ脈絡で考えたい。野中古墳出土の把手付短頸壺の蓋のうち、鋸歯文を施したものがあり、この文様は、釜山華明洞5号墓出土品にみられる。

高杯：奈良県布留遺跡出土の火焔形透孔高杯は咸安地域からもたらされたと考えられる。福岡県古寺6号墳、長崎県恵比2号墓の三角形透孔高杯は慶南西部地域から、奈良県南山4号墳の騎馬人物形土器は、金海地域からの搬入品と考えられる。

一方、5世紀後半から6世紀前半になると、内陸の高霊地域の土器出土例が多数みられ注目される。日本出土の高霊系土器に関する定森秀夫の研究によると福岡県・愛媛県・滋賀県・大阪府・岐阜県などで高霊系土器が出土している（定森1989）。その土器の大部分は器形などが高霊地域土器とほぼ一致することから搬入品と考えられている。このなかで大阪府上町出土の高霊系土器（次山1994）は、軟質でその出土地が集落である可能性が高いので注目される[2)]。

以上にみたように、須恵器と陶質土器の系譜は、4世紀から5世紀前半代までには金海・釜山地域を中心とした馬山・昌原、咸安、晋州地域に、5世紀後半代には高霊を中心とした大伽耶圏にそれぞれの系譜が求められる（図2）。

（2）　鉄器と金属工芸品

馬具：中村潤子（中村1991）は日本における馬具のそれぞれの導入時期に着眼し、第1導入期と第2導入期に分けてその特徴を整理した。以下では中村の研究を中心に最近の千賀久の研究（千賀1994）も参考にしながら日本における馬具の系譜の変化について時期別に整理しよう。

第１次導入期の馬具：轡は、その出現期には福岡県老司古墳や池の上６号墳などでみられるように鑣轡が中心であるが、その後、滋賀県新開１号墳、大阪府七観古墳、大阪府鞍塚古墳などにおいて鏡板轡が見られるようになる。それに伴う鞍は、鞍金具が幅が広く内側が角張って菱形をした平らなもので、鞍金具に間隔の密な鋲帯をもつことが特徴である。

第２次導入期の馬具：５世紀後半代になると、馬装具としての鉄地金銅張りの鏡板を伴う轡や杏葉が加わるようになる。轡はｆ字形と内湾楕円形の鏡板轡が新しく出現する点が特徴である。鞍は、鞍金具に間隔が広い鋲帯をもつようになる。

中村は、このように二つに大別される馬具についての両者の馬具の間には明らかな違いが認められるとともに、日本の古墳からはこの両者を埋める資料が発見されないので、日本の中で自然に型式変化したとは考えられないという。千賀は鞍金具の鋲帯の鋲の間隔が密なものから粗いものへ変わる現象はｆ字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットが加わる第２次導入期における変化の一部と認識し、馬具の系譜を第１次導入期は新羅系に、第２次導入期は非新羅文化圏に求めた。しかしながら、このように異なる馬具の系譜とその変化の背景については、いまだ明らかにしてないので、ここではこの問題について検討を行いたい。

第１次導入期における円形の鏡板轡はその細部はそれぞれ異なるが、金海大成洞２・41・42号墓、馬山縣洞43号墓などから出土例がある。この類型の鏡板轡は、祖型が中国の安陽孝民屯や朝陽哀台子出土の北方民族のものに求められるが、金海大成洞２号墓出土品の鏡板などは洛東江の下流域で北方のものを改良・考案したと考えられている（金斗喆1993)。 このような状況から日本出土品は金海を中心とするその周辺地域からもたらされたと思われる。また、老司古墳や池の上６号墳の轡の類例も金海大成洞墳墓群と釜山福泉洞墳墓群などから多数が出土しているのでそれらも同じく

金海を中心とするその周辺地域からもたらされたと考えられる。

次に、第２次導入期の馬具の系譜について５世紀後半代の伽耶と新羅における馬具の地域性を以下のように明らかにした金斗喆（金斗喆1993）の研究を参考しながら考える。

鏡板は、新羅地域では下縁中央が外に突出したハート形であるのに対し、高霊の大伽耶を中心とする地域では下縁中央が内に窪んだ内湾楕円形板轡が主流である。また、ｆ字形鏡板轡は内湾楕円形板轡と分布が重なって主に大伽耶圏から出土する。鞍は、その鞍金具の形態に地域性がみられる。大伽耶圏では前代からの一般鈹具形の無脚式の鞍金具を引き続き使用しながら、二脚式の鞍金具が新たに作られている。このような二脚式の鞍金具は高霊池山洞44号墳25号石槨、咸陽白川里１―３号墳などから出土した例がある。一方、一脚式の鞍金具は慶州など洛東江東岸地域で分布する。杏葉は、剣菱形が高霊池山洞44号墳、玉田Ｍ３号墳など大伽耶圏に分布し、一方扁円魚尾形は主に慶州を中心とする洛東江東側に分布する。

この金斗喆の研究の成果を参考すると、第２次導入期の馬具である内湾楕円形鏡板轡やｆ字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセット関係は、高霊・玉田を中心とした大伽耶圏にその系譜が求められる[3)]。また、埼玉県稲荷山古墳などにおける二脚式の鞍金具の存在は鞍においてもその影響が考えられる。さらに、千賀が指摘したとおり玉田Ｍ３号墳における剣菱形杏葉の縁金に斜線の刻みを施す技法は、埼玉県稲荷山古墳のｆ字形鏡板轡の縁金にみられる。このように両地域間には馬具のセット関係だけではなく、工人の技法まで一致することは、とくに注目される。

鉄鉾（図３）：鉄鉾は、袋部の断面が円形で袋先が山形抉であるＡ類、全体的な形態はＡ類と同じであるが、袋部の断面が八角形あるいは六角形のＢ類に分類できる。

金吉植は、鉄鉾の袋部断面が八角形のものを百済系、また袋部断面が円

形で、そこに鐔が付いているものを新羅系と分類し、また大伽耶圏においても袋部断面が八角形の鉄鉾が主流であることを指摘した（金吉植1994）。

倭の鉄鉾の変遷には二つの画期が認められる。

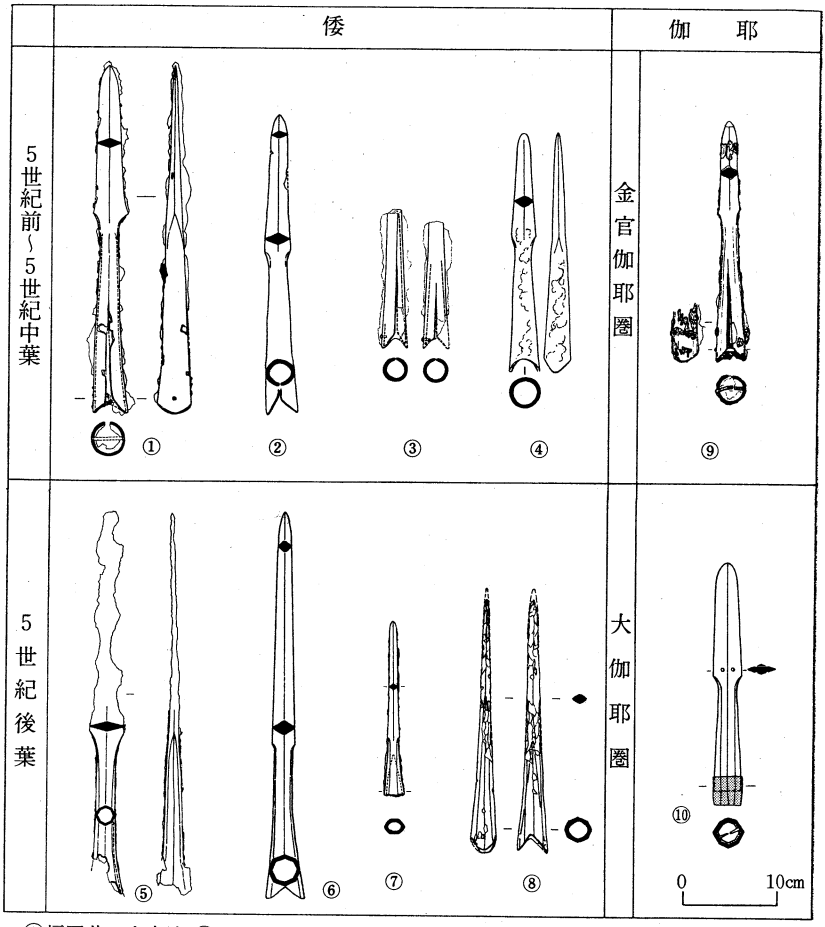
まず、第一の画期は、5世紀前半代におけるA類の出現にある。この類型の鉄鉾は、それまでの長身で関と袋部の境界の断面が四角形である楽浪系のものと系譜を異にしており、奈良県五条猫塚・広島県三ツ城古墳・京都府宇治二子山北墳などから出土している。このような類型の鉄鉾は、金海礼安里・釜山福泉洞墳墓群から多量に出土しており、そのなかで最も古いものが、4世紀の中葉の金海礼安里77号墳にみられるので、その系譜は、金海・釜山地域の金官伽耶圏に求められる。

第二の画期は前代と異なるB類の鉄鉾が突然出現する5世紀後半代である。B類の鉄鉾は熊本県江田船山古墳・和歌山県大谷古墳・埼玉県稲荷山古墳・京都府宇治二子山南墳などの出土例がある。この類型の鉄鉾は、百済系鉄鉾と設定されているものであるが、大伽耶圏により広く分布している。5世紀後半代の倭の鉄鉾の系譜は、この時期の渡来系文物のほとんどが大伽耶系である脈絡からすれば、百済地域から直接受け入れたと考えるより大伽耶圏に求めるのが妥当である。このような鉄鉾の変化を象徴的に示すのは、京都府宇治二子山古墳における例である[4]。

甲冑：古墳から出土する甲冑のなかでも、最も中心的なものは短甲である。初期の短甲は、山梨県大丸山古墳、大阪府紫金山古墳などで出土した竪矧板革綴短甲や、滋賀県安土瓢箪山古墳など出土の方形板革綴短甲が主流である。東潮は竪矧板革綴短甲について慶州九政洞3号墓出土品と釜山福泉洞10号墓などにおける竪矧板鋲留短甲の存在を指摘し、その系譜を慶州をふくむ洛東江流域に求めた（東1990：170-171）。申敬澈は、竪矧板革綴短甲について日本出土品における細部の形態や革綴技法による製作などの韓国出土品との違いを認めたうえで、両者の相互関連性を想定し、また

その系譜を金海大成洞墳墓群と釜山福泉洞墳墓群における多量の出土例を指摘しながら金官伽耶地域を求めた（申1993）。

内山敏行は古墳時代の中・後期における朝鮮半島系甲冑の日本列島系甲冑への影響について冑を素材に2回の画期を設定しその影響について次の



①福岡井の上古墳 ②京都宇治二子山古墳 ③大阪盾塚 ④大阪野中アリ山古墳
⑤福岡塚堂古墳 ⑥京都宇治二子山南墳 ⑦埼玉稲荷山古墳
⑧熊本江田船山古墳 ⑨釜山福泉洞10・11号墳 ⑩高霊池山洞44号墳

図3　倭の鉄鉾の系譜とその変遷

ような整理を行った。

5世紀前半代の第一の画期における滋賀県新開1号墳・奈良県五条猫塚の眉庇付冑と京都府久津川車塚古墳の衝角付冑にみる幅の細長い竪矧地板は、釜山市福泉洞10号墳などの伏鉢付冑の影響によるものと考えた。

5世紀後半代―6世紀前半代の第二の画期における大阪府南塚古墳・千葉県金鈴塚などにみる竪矧広地板の衝角付冑の成立は陜川郡玉田70号墳・伝慶尚道出土品などの影響によって、また、群馬県綿貫観音山古墳と福島県渕の上1号墳の突起付冑は陜川郡磻溪堤 KaA 号墳の冠帽冑などの影響によってそれぞれ成立したと想定した（内山1992）。

伽耶地域の5世紀代の甲冑はいまだその内容があきらかではない状況であるが、冑においてはある程度の傾向が把握できる。4世紀から新羅・伽耶地域ともに伏鉢付冑が広く分布していたが、5世紀後葉になるとこの両地域において地域色がうまれるようになる。すなわち、5世紀中葉までは慶州皇南洞109号墳3・4槨と釜山福泉洞21号墳などでみられる細長い竪矧地板をもつ伏鉢付冑が両地域に共存していた。その後、新羅地域には引き続き細長い竪矧地板をもつ伏鉢付冑が依然と存在する。一方、伽耶地域には5世紀後葉になると陜川玉田70号墳と伝慶尚道出土品にみる幅広い竪矧地板をもつ伏鉢付冑が新しく出現するようになる。また、そのなかで陜川玉田M3・磻溪堤 KaA 墳などにみられるように小札や幅広い竪矧地板をもつ冠帽系冑が出現する。この冠帽系冑の系譜について考えてみよう。南原月山里M1―A墳の伏鉢付冑には伏鉢を竪矧地板に綴じる楕円形の中間金具が出現するが、この金具は伏鉢を竪矧地板をそのまま連接して綴じたそれまでの伏鉢付冑にはみれないものであり、その後の冠帽系冑の冠帽状伏鉢と小札や竪矧地板を綴じる金具に発展したものと考えられる。このことから冠帽系冑とその系列のものと考えられる突起付冑は伏鉢付冑を改良した伽耶地域の独特なものと思われる。これらの幅広い竪矧地板をもつ

伏鉢付冑と冠帽系冑は伽耶地域のなかでも主に大伽耶圏に分布しており、大伽耶型の冑と設定できる。

鉄鋌（図４）：韓国における鉄鋌の分布は、金海・釜山地域、慶州地域、栄山江流域の三地域に集中している。このなかでどの地域の鉄鋌が倭にもたらされたのであろうか。

ここでは、倭の古墳などから出土した鉄鋌の規格の検討を通してその製作地を探って行きたい。東潮の研究（東1987）を参考しながら、長さによる分類を行った結果、以下のとおり大きく四つの類型が設定できる。

1類型は奈良県大和6号墳の大型品を指標とする（釜山福泉洞21・22号墳大型）

2類型は下山古墳の出土品を指標とする（福泉洞10・11号墳大型）

3類型は奈良県南山古墳の出土品を指標とする（福泉洞10・11号墳小型）

4類型は兵庫県宮山古墳出土品を指標とする（釜山福泉洞4号墳出土品）

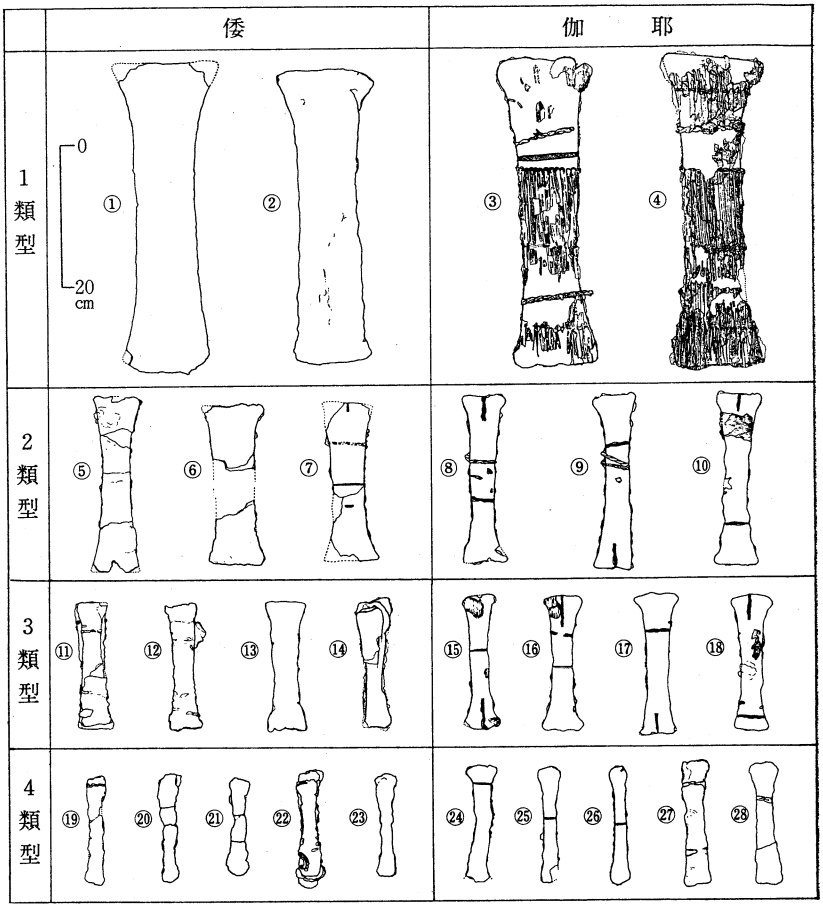
これらの類型は金海・釜山地域の出土品の規格とほぼ一致することが注目される。一方、慶州地域の鉄鋌は、金海・釜山地域さらに倭の規格とは一致しない。例えば、それらの類型のなかに含まれない大型品が天馬塚・皇南大塚で存在する。以上のことから倭の鉄鋌は金海・釜山地域から搬入された可能性が極めて高い。

盛矢具（図５）：古墳時代前期には靫が盛矢具として使用されていたが、古墳時代中期になると胡籙が初めて出現し、靫に入れ替わって盛矢具の主流になる。

田中新史は、韓国と日本出土の盛矢具を集成し、そのなかで特に5世紀前半代の倭の胡籙の系譜の整理を行った（田中1988）。全玉年は韓国における盛矢具の系譜を設定し、その地域性を明らかにした（全1992）。ここでは主に田中と全玉年の研究成果を参考しながら、いまだ明らかになって

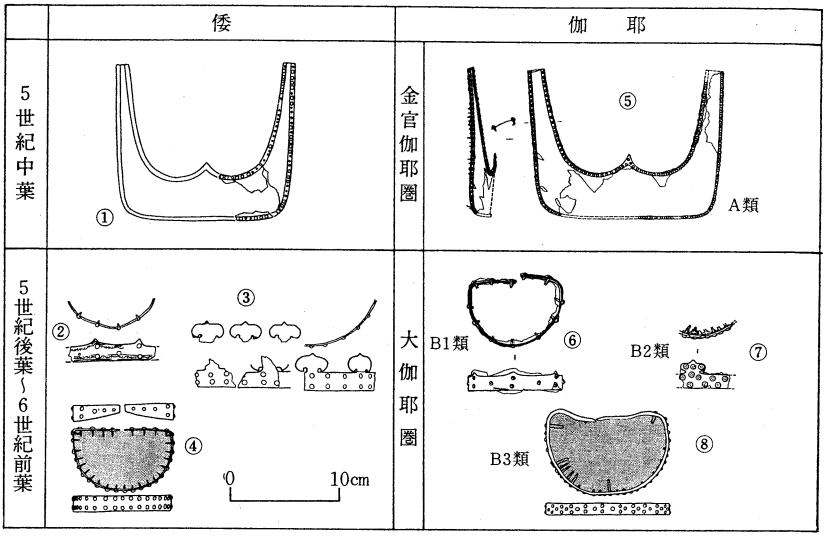
いない５世紀後半代の倭の胡籙の系譜を中心に分析を行う。

全玉年は、盛矢具の主前面飾金具を山形（Ⅰ類）と帯輪形（Ⅱ類）に大きく分類し、Ⅰ類が主に金海・釜山地域の金官伽耶と新羅地域に分布して



①－②大和６号墳　③－④福泉洞22号墳　⑤南二重堀４号住居　⑥美濃山王塚
⑦下山古墳　⑧－⑩福泉洞11号墳　⑪－⑫新開２号墳　⑬南山４号墳　⑭鞍塚
⑮－⑱福泉洞11号墳　⑲－㉑出作遺跡　㉒宮山古墳　㉓大和６号墳　㉔－㉖福泉洞４号墳
㉗－㉘福泉洞１号墳

図４　鉄鋌の規格によるその産地の比定



①内裏塚古墳　②法連40号墳　③沖ノ島７号　④八幡大塚２号墳　⑤釜山福泉洞21・22号墳
⑥陝川玉田４号墳　⑦陝川玉田M４号墳　⑧高霊池山洞連結石槨

図５　倭の盛矢具の類型とその系譜

いるのに対し、Ⅱ類が大伽耶圏に分布していることを明確にした。

大伽耶圏においても５世紀後葉までは山形金具を備えたⅠ類の盛矢具が存在するが、その以来は帯輪形の金具をもつⅡ類の盛矢具が中心になる。

ここではまず主前面飾金具がU字状のものをＡ類（全玉年Ⅰ類）、帯輪状のものをB類（全玉年Ⅱ類）と大きく分類し、さらにB類は山形をＢ１類、三葉形立飾付きのものをＢ２類、帯輪形をＢ３類に細分して系譜の分析を行いたい。

A類は初めて倭に出現する類型で、代表的なものは福岡県月の岡古墳と千葉県内裏塚の出土品が存在する。これらの古墳の盛矢具は、主前面飾金具の形態およびその付属具である縣垂飾金具の形態から、すでに田中と全玉年が指摘したように釜山福泉洞21・22号墳出土品の系譜を引くものである。田中が指摘したとおりこの三つの古墳出土品は、縣垂飾金具である中

円板状金具の規格や構造と文様が極めて一致しているので同一製作集団の作品である可能性が高い。

B類の盛矢具は5世紀後半代に新しく倭に出現し、A類に入れ替わって盛矢具の主流になる。B類のなかで最も主流をしめす山形のB1類は和歌山県大谷古墳・大阪府七ノ坪古墳・法連40号墳などから出土例がある。この類型はもとはA類から咸陽白川里1-3号墳出土の1つの山形に、またそこから陜川玉田M4号墳出土の多数の山形に型式変化したものである。従来、B1類は倭の独自的なものと考えられてきたが、その型式変化の方向性と玉田地域における出土例から伽耶地域にその系譜が求められる。三葉形立飾付きのB2類は、西宮古墳・沖ノ島7号遺跡などから出土例がある。

この類型について田中は三葉文の出自などを考慮して新羅に系譜を求めたが、陜川玉田M4号墳出土例から大伽耶圏にその系譜が求められる。帯輪形のB3類盛矢具は、千葉県富士見塚などから出土した。この類型も陜川玉田M3号墳などからの出土例から同じく大伽耶圏にその系譜が求められる。

冠：倭における出現期の冠は額帯式で中央に大形の宝珠形の飾りを持つ福井県二本松山古墳、長野県桜ヶ丘古墳出土品が存在する。

二本松山古墳からは二つの冠が出土した。一つは鍍銀青銅製で、U字形の立飾りの上に三本の宝珠形の飾りがあるものである。

他の一つは金銅製冠で、上方に指状の切り込みような飾りがあり、また幅広い冠帯の中央に大形の逆宝珠形の飾りが存在するものである。この二点の冠の原形はその形態から高霊池山洞32号墳出土の金銅製冠に求めることができる（早乙女1990：135）。

このほか注目すべきものとして、長野県桜ヶ丘古墳出土の冠がある。この古墳の冠は、額帯から直接に3本の突起が分れていて、半円形の立飾が

ない点で二本松山の冠と異なるが、前方のみを飾るという点では共通している。なお桜ケ丘古墳の冠は、辺縁に波状点線文を施文している点や、中央の突起にオームの嘴状の飾りを持っている点で、池山洞32号墳の冠との関わりをもつ（白崎1992：19—20）。このように出現期の倭の冠の系譜は高霊地域に求められる。

耳飾：石本淳子は日本の垂飾付耳飾の技術系譜を追究するなかで、日本出土の垂飾付耳飾の中で最も多い兵庫鎖と中空飾の組み合わせの耳飾を、高霊池山洞古墳群で出土している耳飾にその系譜を求めた。このような耳飾は、5世紀後半代から6世紀前半代にかけて熊本県江田船山古墳・福岡県セスドノ古墳・兵庫県宮山古墳・奈良県新沢109号墳・和歌山県大谷古墳・福井県向山1号墳などの日本列島のほぼ全地域の古墳から出土している（石本1990）。また、韓国では、出土例の少なかった有鎖式長形耳飾も最近、玉田古墳群などから多数出土している。

以上の検討から、倭の古墳時代中期の渡来文物の系譜は、その前半代には金海・釜山地域の金官伽耶圏に、その後半代には金官伽耶圏から入れ替わって高霊・玉田を中心とした大伽耶圏に求めることが可能である。

3　伽耶における倭系文物

以上で考察した伽耶の二地域から倭への文物の移動と同時に連動して行われた倭系文物の伽耶への移動について以下で考察しよう。

最近、大成洞墳墓群を中心とした金海・釜山地域では4世紀代から5世紀前半まで多数の倭系遺物の出土が注目される。巴形銅器、筒形銅器、紡錘車形石製品、鏃形石製品、玉杖などがその代表的な例である（申1994）。筒形銅器は金海・釜山地域以外には咸安の沙道里から出土例がある。倭製の内行花文鏡と銅鏃は昌原三東洞から出土例がある。

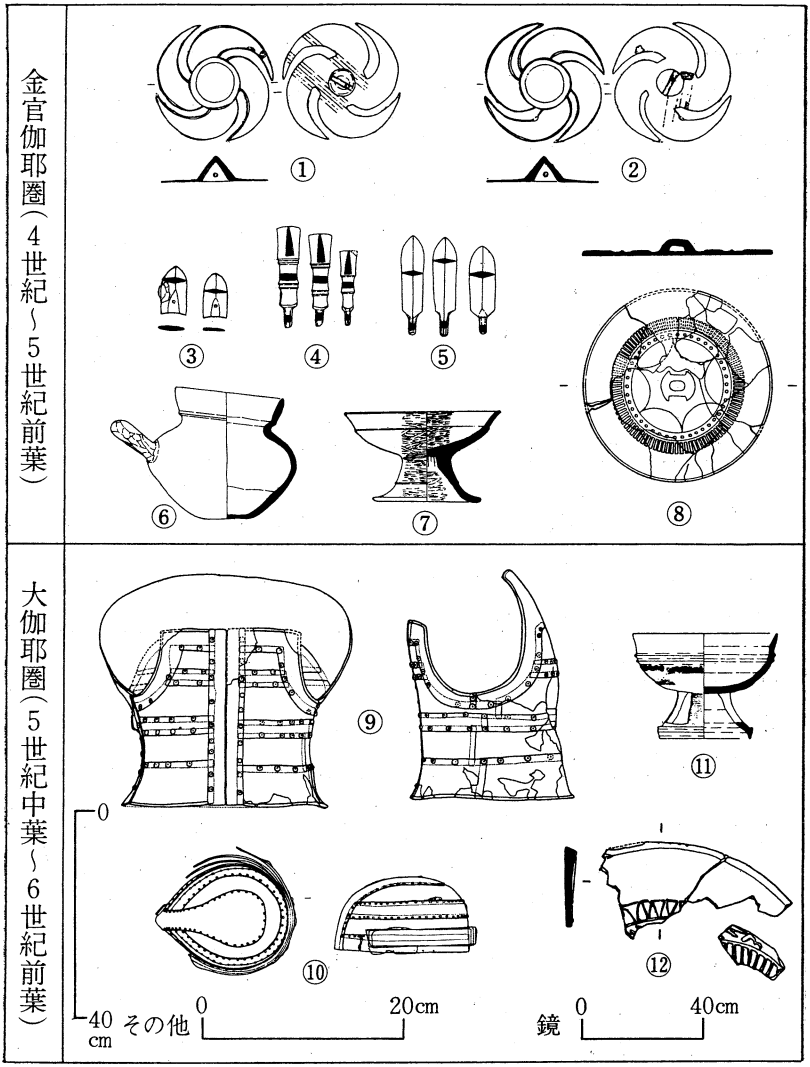
また、倭の土師器の影響を受けて製作された土師器系軟質土器は金海・

釜山を中心に慶州地域などで出土している。安在晧は土師器系軟質土器を5段階に分けて編年し、その時期別内容を次のとおりに明らかにした。すなわち、土師器系軟質土器が最も原形に忠実な時期を倭人らが移住した時と考え、第1次移住期を4世紀前葉の1段階に、第2次移住期を4世紀後葉の3段階の時期に想定する。そして、第1次移住の直接的な契機は、近畿地域の布留式土器が列島全域に拡散することに、第2次移住の契機は、文献にみられる4世紀後半代の倭の活動にその背景を求める。また、4段階以降の土師器的要素の減少は、5世紀初め以降の伽耶と倭間の関係悪化にその原因が考えうる（安1993）。

ここで、筆者が注目するのは、4世紀代の金海・釜山地域に土師器系軟質土器が集中すること、また5世紀中葉の5段階以降両地域からその土器の存在そのものが消滅してしまうことである。すなわち、このような土師器系軟質土器の状況は金官伽耶地域の倭系文物の渡来の変化のありかたをそのまま反映しているのである。

一方、5世紀後半代になると伽耶の内陸地域に倭系文物が出現する。6世紀前半の高霊池山洞45号墳出土の鏡の鏡式は不明であるが、銅質・製作技法から倭鏡と判断されている。この鏡は大きさなどから全南斉月里の墳墓出土の変形六獣鏡に近いものと考えられている。また、関野貞が晋州地域墳墓出土品として報告した資料のなかにも倭鏡が存在する。この鏡は、鏡背に有機質のものが付着しており、文様の詳細は判断できないが、獣形鏡の類型と考えられている（小田1988）[5]。陜川鳳渓里20号墳ではTK208型式からTK23型式に併行する高坏が1点出土した（酒井1993，899—913）。

高霊池山洞32号墳の横矧板鋲留短甲・頸甲・横矧板鋲留衝角付冑および咸陽上柏里墳墓群の三角板鋲留短甲は、製作地論争の対象になっているものである。藤田和尊は、短甲と冑の製作時期に比べて頸甲のみが古相を示



①－⑤金海大成洞13号墳　⑥－⑦釜山福泉洞57墳
⑧昌原三東洞18号墳　⑨－⑩高霊池山洞32号墳
⑪陜川鳳渓里20号墳　⑫高霊池山洞45号墳

図6　伽耶地域における倭系文物の時期別流入状況

す高霊池山洞32号墳の甲冑セットのような組み合わせが熊本県江田船山古墳や福井県二本松山古墳に存在することを明らかにし、またその三古墳が共に宝珠形金銅冠を有していることを指摘した（藤田1985）。ここで重要なのは、甲冑の製作地の問題を別にして、前章で述べた大伽耶系の二本松山古墳の金銅冠が象徴的に表すようにこの時期の伽耶と倭における活発な地域間交流のなかで両地域で同一型式の甲冑が存在することである。

以上の検討の結果、倭系文物の古墳時代中期の前半には、金海と釜山の金官伽耶圏に、その後半には高霊を中心とした大伽耶圏にそれぞれ時期を異にして渡来していたことが明らかである（図6）。

4　渡来系文物からみた伽耶と倭における政治的変動

以上の考察によって、古墳時代中期において二つの異なる系譜の渡来系文物の導入が明らかになった。すなわち、古墳時代中期前半には、金海と釜山の金官伽耶圏の文物が、その後半には高霊と玉田の大伽耶圏の文物がそれぞれ時期を異にして渡来したのである。一方、倭系文物が中期の前半には、金海・釜山を中心とする金官伽耶圏に、その後半には高霊を中心とした大伽耶圏にそれぞれ時期を異にして渡来する。

伽耶と倭の両地域の地域間交流の研究は、いままで伽耶・倭の内的情況のみにもとづいて行われてきた研究成果を再検討し、さらにその内容を発展させることができる。

従来、伽耶は小国群の分立状態にあり、中核がない弧立分散的世界と考えられてきたが、最近の伽耶地域に対する考古学と文献史学の目覚ましい成果によって、前・後期に連盟の結成による複合社会の成立が考えられるようになった。

まず、いまだ明らかになっていない金海の金官伽耶を中心とした前期における伽耶連盟の範囲と現在も議論になっている後期の伽耶連盟の構造な

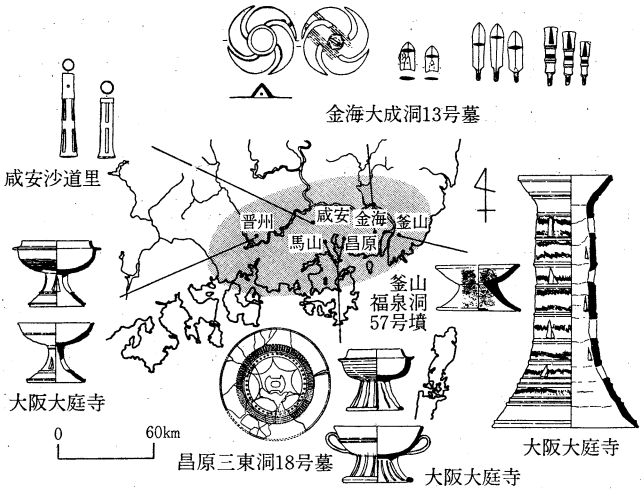


図7　大庭寺の初期須恵器工人の出自地域と倭系文物の分布圏からみた前期伽耶連盟の範囲

どについて伽耶・倭の両地域の地域間交流からアプローチしたい。前期の伽耶連盟の範囲は倭に派遣された初期須恵器の工人の出自地域と金海勢力が倭との交易などの交流で入手し、周辺地域に分与する過程で形成された倭系文物の分布圏からある程度の輪郭を設定できる。初期須恵器の代表的な遺跡である大阪府大庭寺遺跡出土の須恵器については、筆者などの研究によってその工人の出自が大きく分けて金海・釜山地域を中心に馬山、昌原、咸安、晋州などの地域に求められた。また、金海を中心に伽耶地域のなかで倭系文物の出土の範囲をみるとその北側はいまだあきらかにしてないが、西側は咸安（筒形銅器）周辺まで及ぶことがわかる。このように初期須恵器の工人の出自地域と倭系文物の分布圏がほぼ対応していることから両方の分布圏における強い関連が想定できる。筆者は両方の分布圏が概ね前期の伽耶連盟の範囲を反映していると考える（図7）。

また、5世紀後半以降の後期の伽耶連盟の構造については、最近の馬具（金斗喆1993)、武器（金吉植1994),武具（全玉年1992）祭祀圏（朴1994、尹・朴1995）階層構造（朴1995）などの研究によって高霊を中核とする大伽耶連盟の成立が明らかになっている。このような後期の伽耶連盟の構造については、伽耶と倭の地域間交流のありかたからも傍証できる。すなわち、これまで本研究で明らかにしたように後期の伽耶連盟の結成以来の伽耶と倭との交渉において大伽耶が中心的な役割を果たした事実は、伽耶におけるその勢力の盟主的立場を雄弁に物語ることである。また、倭の古墳時代中期の前半期と後半期の渡来系文物が金官伽耶圏から大伽耶圏に転換することや倭系文物が金官伽耶圏から大伽耶圏に移ることは、伽耶を代表し、倭との貿易と交流を掌握した政治的中核が金海から高霊への移動する政治的変化を反映することである。

さらに注目したいのは、5世紀前葉の河内政権の成立にともなう倭における全列島規模の政治的変動や5世紀後葉の雄略朝の倭における全列島規模の政治的変動が伽耶地域とのなんらかの関わりをもつ可能性がある点である。

白石太一郎らによって指摘されているように、初めは奈良盆地東南部の三輪山周辺に集中していた大形前方後円墳が、4世紀後半期には奈良盆地北部に移り、4世紀末に大阪平野に移行し、古市・百舌鳥古墳群が形成される。また、大形前方後円墳は、古市・百舌鳥の両古墳群間を移動し、このような大形前方後円墳の移動は大王権力の動向が、その背景にあることを想定した（白石1989)。

都出比呂志は、京都府の桂川右岸の古墳時代首長系譜の継続と断絶を明らかにし、そこから5世紀前葉、5世紀後葉、6世紀前葉における画期を設定した。また、それぞれの画期は、地域内の自主的動きではなく、全国的に連動する現象であり、各地の首長の地位を左右するような大王権力の

周辺における全国レベルの政変をその背景に想定している（都出1989）。

ここでは、これまで大形前方後円墳の移動の契機として考えている全列島レベルの政変については主に倭の国内的な情況を中心に議論されてきて、その国際的契機についてはあまり注目されなかったことを問題点として取り上げたい。

古墳時代前期において確立した三角縁神獣鏡、腕輪形石製品、銅鏃の組み合わせの威信財システムが崩壊し、古墳時代中期には新たな武具、武器などによる威信財システムが登場することは重要である。従来の権力のシンボルであった三角縁神獣鏡がその地位を失ってゆく背景には、その権威づけの拠り所であった中国王朝の滅亡があげられている（福永1994）。

また、田中晋作は畿内およびその周辺部に所在する古墳の埋納品にみられる三角縁神獣鏡、腕輪形石製品、甲冑について検討し、従来古墳時代の各時期において標識とされたこれらの威信財はそれぞれの時期の異なる主導勢力が各勢力に対して供与・供給した物品と考えた。そして、三角縁神獣鏡が社会的・政治的に重要視されなくなったのではなく、三角縁神獣鏡を供与した勢力が政治上重要な役割を担わなくなったことをその理由と考えている。すなわち、古市・百舌鳥の両古墳群の出現が象徴する新興勢力の台頭によって三角縁神獣鏡の供与による威信財システムが崩壊し、古市・百舌鳥の両古墳群の被葬者集団の主導のもとに甲冑の供給によって象徴される新たな威信財システムが築かれたというのである（田中1990）。

さて、それに代わって登場する威信財が、どのような地域から求められたのか。

筆者は、三角縁神獣鏡を中心とする威信財システムに代わって登場した古墳時代中期の威信財システムは甲冑のみではなく、それ以外の武具、馬具、武器などを含む複合的なものと考えている。この時期のこれらの威信財は本稿で明らかにしたように金海・釜山を中心とした金官伽耶地域から

入手したと判断される。また、威信財とともに鉄や陶質土器などの生活必要物資や須恵器などの工人もこの地域から取り入れたと考えられる。

では、どのような契機でこの地域から威信財や生活必要物資と工人が渡来したのか。

4世紀後半代から5世紀前半代の歴史的情況を参考にしながらこの問題について検討したい。この時期の状況をある程度記録しているのは『広開土王碑』である。広開土王碑の辛卯年（391）には倭が侵略し百済、新羅、伽耶を臣民にしたという記事が存在する。また、庚子年（400）には、新羅城（慶州）に侵略した倭人を、歩騎5万の高句麗軍が駆逐したという記事がみられる。

これまで、日本の研究者はこの記事を倭による大規模な朝鮮半島侵略の情況を示すと考え、渡来文物の搬入の背景として考えてきた。しかし、不動の真実と考えたこの記事は最近の文献史学による全体的な碑文構成の検討結果、高句麗の軍事行動を正当化するための論理、「前置き文」であることが明らかになった。すなわち、辛卯年の記事は高句麗が軍事行動の際、その口実を倭に求めて誇張して正当化したということである（山尾1989：196—203）。

さて、庚子年（400）条のなかでは敗退した倭人が任那伽羅へと逃げ、高句麗軍が追撃し任那伽羅城（金海）を陥落させたという内容がある。ここで筆者が注目するのは倭人が金海地域に逃げるということである。すなわち、倭の軍事行動が金海の金官伽耶勢力との深い関わりをもっていたと考えられるのである。

伽耶は高句麗の南進政策に対抗するために倭の軍事力を、倭の勢力は威信財と鉄などの必要物資をそれぞれ要求した結果が古墳時代中期の成立と倭軍の派遣と考えられる。さて、筆者は、この時期に伽耶と交流した倭の集団は奈良盆地に基盤をもつ勢力ではなく新たに台頭した河内勢力と考え

ている。その理由は、当時の伽耶との交流を象徴する大庭寺遺跡の存在である。本稿で検討したように、大庭寺遺跡出土の初期須恵器の工人は釜山・金海地域の工人集団の引率下に複数の工人集団が渡来したものと考えられる。また、これらの工人は、大庭寺遺跡出土の初期須恵器にみる時期差の存在から一定の時期に渡って継続的に渡来したものと判断できた。このような伽耶との交流のシンボル的な生産拠点が百舌鳥古墳群の周辺に築かれたことは倭における河内勢力の位相を雄弁に物語ることである。

倭は、5世紀前半期まで馬具、武器，武具、鉄鋌などの物資および土器などの工人を、金海地域を窓口にしながら輸入してきたが、やがては、5世紀後半期からの本格的な新羅勢力のこの地域への移入によって交流の窓口が封鎖されるようになる。このような情況のなかで倭とこれまであまり交流がなかった内陸の大伽耶との関わりが深くなるのが注目される。この時期、高霊の大伽耶は高句麗の南進と新羅勢力による金海勢力の没落という伽耶地域の危機のなかで諸伽耶勢力を結集させ大伽耶連盟を結成したものと考えられる。

また、5世紀後葉の雄略朝の倭における全列島規模の政治的変動期が、同時期における伽耶の政治的中核が金官伽耶から大伽耶への移動する政治的変動期と対応することは興味深い。

都出比呂志が明らかにした全列島レベルの変動のなかで5世紀後半における列島レベルの政変には、その国内的な情況とともに、これまで依存してきた金海地域における交易窓口の封鎖と新興の大伽耶勢力の台頭が一定の関わりをもつと考えられる。すなわち、金海勢力に代わって新しく伽耶の盟主として登場した高霊の大伽耶系文物が、急速に倭の前代の金海の金官伽耶系文物に入れ替わるように各地の首長墓に副葬されるのである。この時期の倭における全国レベルの政変のなかで、それまでの首長系譜とは断絶し、新たに台頭した各地域の有力首長墓である埼玉県稲荷山、和歌山

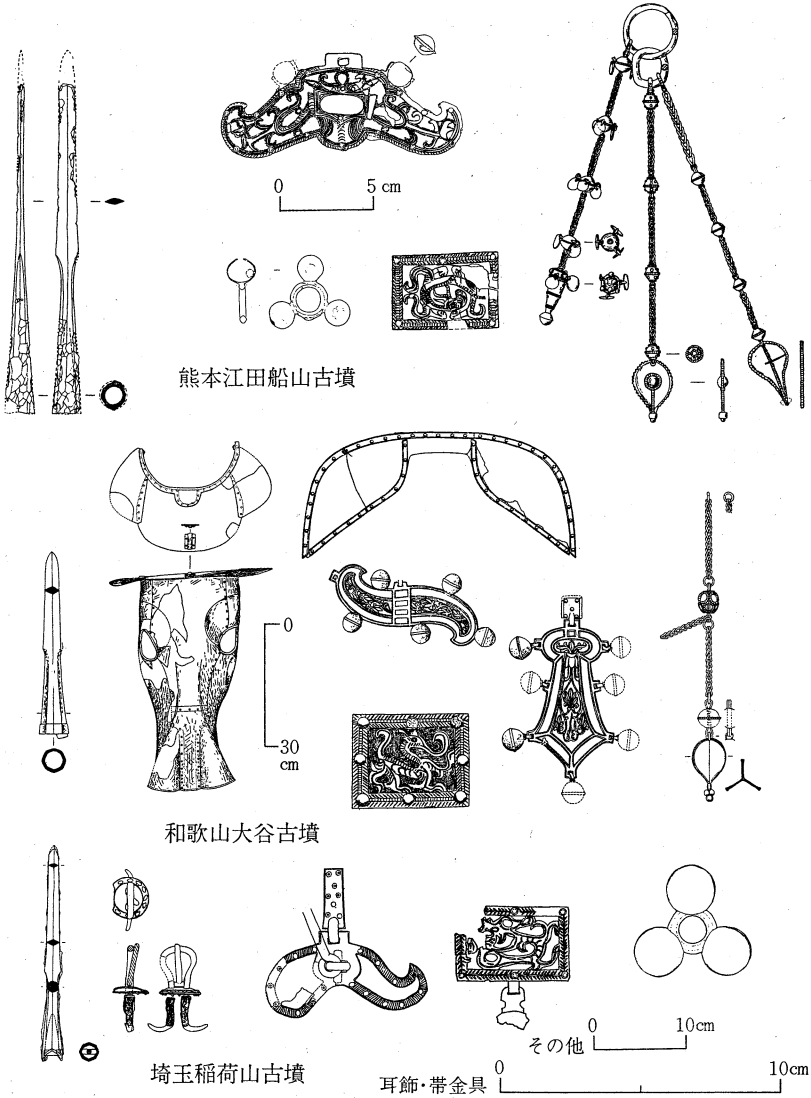


図8　5世紀後葉の倭の有力首長墓における大伽耶系文物

県大谷、熊本県江田船山などの古墳に大伽耶系の威信財が主流を示めるようになる（図８）。この情況から倭の大首長のなかで、それまで、金海の金官伽耶の交易などを含めた交流に依存してきた勢力の衰退に伴い、新しく台頭した大伽耶勢力と結びついた新興勢力の存在が想定できる。また、伽耶の大王墓である高霊池山洞45号墳から倭鏡が出土したこともこのような脈絡のなかで注目するべきである。このような情況は、文献記録からも読み取られる。『雄略紀』23年（479）に、筑紫の安致臣・馬飼臣等、船師を率いて高句麗を撃つという記事がある。また、この時期には『三国史記』新羅本記に倭人の新羅侵犯記事が６回あり、第四半期への集中度が高い。この時期高句麗は南進し、その領域は竹嶺から鳥嶺から忠清道の北半あたりまで拡大して伽耶の後方を脅かしていたと思われる。この時期の高句麗の圧迫は伽耶に再び倭の軍事力を求めさせたと考えられる。

文献史における渡来人の研究によって応神期に第一次渡来人の波があり、また雄略の時代に移住民の第二次渡来人の波のあることが明らかになっている（山尾1989：286—305）。この情況は本稿の渡来文物の研究と対応することである。

以上で考察してきたように伽耶と倭における政治的変動は相互作用の視点から分析を加えることによって、両方の政治史の分析に新しい展開を期待することができよう。

＜**謝辞**＞　本稿は都出比呂志・福永伸哉両先生の御指導にもとづいて作成したものである。また、執筆と資料調査の際、朱甫暾、李熙濬、趙榮済、金斗喆、東潮、大庭重信、福岡澄男、藤田憲司、橋本達也、平川祐介、藤丸詔八郎、永島暉臣慎、岡戸哲紀、岡内三真、岡本健一、大野左千夫、定森秀夫、清野孝之、杉井健、志村哲、田中晋作、外山政子、吉井秀夫、柳本照男の諸先生、諸氏には大変お世話になった。英文要旨は佐々木憲一氏に作成していただいた。末筆ながら記して感謝の意を表する。

注

1) たとえば、 C. Renfrew は、ブリテン島が鉄器時代に大陸から移動してきた一連の移民によって影響されたという学説について、大陸との政治的交流や交易があったことは、確かであるが、移住を示す考古学的証拠がないことを指摘している。また、彼は、交易によって大陸のラ・テーヌ文化がブリテン島に伝わり、その島の民族に影響を与え、そして、ブリテン島からその文化の文物を模倣する工人が現われ、次代にその文化はブリテン島に根付き、異型のラ・テーヌ文化が発達したと考えている（Renfrew 1987)。

2) また、大庭寺遺跡からも高霊系土器の出土例が存在する。土器の選別場と考えられている1-OLから高霊系の高杯形器台2点と蓋1点が出土し、TG231からも高霊系の蓋が1点出土している。このなかで、蓋2点は高霊地域の蓋とその形態がほぼ一致する。一方、高杯形器台の場合、全体的プロポーションや杯身の形態などの器形が高霊地域のものと若干形態が異なるが、三角形透孔、突帯の形態、脚の形態は類似性が認められる。これらの器台は、脚の透孔の組み合わせが2段と3段であることや脚の形態などから、5世紀後葉の池山洞44号墳段階に位置付けられる。大阪府の大園遺跡と福岡県羽根戸古墳などで出土した筒形器台は、壺状の上部と下部が湾曲しながら広がる高霊系の大型筒形器台の系譜を引くものと考えられる。

3) この時期の和歌山県大谷古墳出土の馬冑はその矧板の幅が広い羽子板天井型であり、玉田M3、28号墓出土品の系譜につながるもので高霊・玉田を中心とした大伽耶圏に系譜が求められる。

4) 宇治二子山古墳では、南北に接して造られた2基の古墳で構成されている。そのなかで、5世紀中葉の北墳では、A型類の鉄鉾が、5世紀後葉の南墳からは、B型類のものが、それぞれ出土しており、ほぼ1世代の間における鉄鉾の変化が読み取れて興味深い。

5) 小田富士雄は韓国出土倭鏡を大きく4世紀後半から5世紀前半のものを1期（昌原三東洞18号墓内行花文鏡）と、5世紀後半から6世紀前半のものを2期（高霊池山洞45号墳鏡、晋州発見獣形鏡）に分け、それぞれの画期を設定した。また、それらの倭鏡の搬入の背景を1期は4世紀後半に始まる倭との軍事交渉に、2期は記紀に見られる伽耶・百済と倭の関係にそれぞれ求めた。これらの鏡にみる画期は伽耶地域における倭系文物の導入の時期や地域のありかたを反映するものと考えられる。

参考文献（著者名のアルファベット表記順）

穴沢咏光・馬目順一1975「南部朝鮮出土の鉄製鋲留甲冑」『朝鮮学報』76、朝鮮学会

安在晧1993「土師器系軟質土器考」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社

東潮1987「鉄鋌の基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要』12

江上波夫1967『騎馬民族国家』中公新書

千賀久1994「日本出土初期馬具の系譜』『橿原考古学研究論集』12、橿原考古学研究所

趙榮済1990「三角透窓高杯에대한一考察」『嶺南考古学』嶺南考古学会

石本淳子1990「日韓の垂飾付耳飾についての一考察—古墳時代の日韓関係考察のために—」『播磨考古学論叢』精文舎

福永伸哉1994「三角神獣鏡の歴史的意義」『倭人と鏡その２—３・４世紀の鏡と墳墓』埋蔵文化財研究会

藤田和尊1985「日韓出土の短甲について—福泉洞10墳・池山洞32号墳出土例に関連して—」『末永雅雄先生米寿記念献呈記念論文集』末永雅雄先生米寿記念会

全玉年1992「伽耶의金工品에対하여—盛矢具研究」『伽耶考古学論叢』1

金錫亨1969『古代朝日関係史』勁草書房

金斗喆1993「伽耶の馬具」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社

金吉植1994「三国時代鉄鋌의変遷—百済系鉄鋌の認識—」『百済研究』24

中村潤子1991「騎馬民族説の考古学」『考古学その見方と解釈』筑摩書房

三辻利一・虎間英樹 1994「久米田古墳群出土の初期須恵器」『韓式土器研究』5、韓式土器研究会

小野山節1975「騎馬民族征服王朝説をめぐって」『古代史発掘６—古墳と国家の成立ち—』講談社

小田富士雄1988「韓国古墳出土の倭鏡」『考古学叢考』斉藤忠先生頌寿記念論文集刊行会

朴天秀1993「韓半島からみた初期須恵器の系譜と編年」『古墳時代における朝鮮系文物の伝播』埋蔵文化財研究会

朴天秀1995「伽耶の社会構造に対する予備的考察」『近藤義郎古希記念考古文集』考古文集刊行会

Renfrew, C. 1987 Archaeology and Language: the puzzle of Indo—European origins, Cambridge University Press（『ことばの考古学』橋本槇矩訳、青土社1993）

早乙女雅博1990「今來の技術と工芸」『古代史復元７ —— 古墳時代の工芸』講

談社
定森秀夫1989「日本出土の高霊タイプ系陶質土器(1) ── 日本列島における朝鮮半島系遺物の研究 ──」『朱雀』2、京都文化博物館
酒井清治1993「韓国出土の須恵器類似品」『古文化談叢発刊20周年小田富士雄代表還暦記念論集』2、九州古文化研究会
申敬澈1983「伽耶地域における4世紀代の陶質土器と墓制 ── 金海礼安里遺跡の発掘調査を中心として ──」『古代を考える』34、古代を考える会
申敬澈1993『伽耶古墳文化の研究』筑波大学文学博士論文
申敬澈1994「伽耶地域出土倭系遺物の歴史的意義」『伽耶および日本の古墳出土遺物の比較研究』
白石太一郎1989「古墳の造られた時代」『日本のあけぼの』5毎日新聞社
白崎昭一郎1992「二本松山古墳の年代について」『福井考古学会会誌』10福井考古学会
新谷武夫1993「台付把手壺考」『考古文集 ── 潮見浩先生退官記念論文集 ──』潮見浩先生退官記念事業会
田中晋作1990「百舌鳥・古市古墳群の彼葬者の性格について」『古代学研究』122
田中新史1988「古墳出土の胡籙・靫金具」『井上コレクション弥生・古墳時代時代資料図録』
都出比呂志編1989「古墳時代の王と民衆」『古代史復元』6講談社
次山洋1994「上町台地西録出土の韓式土器について」『韓式土器研究』5、韓式土器研究会
内山敏行1992「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『研究紀要』1、財団法人栃木県文化振興事業団
尹容鎮・朴天秀1995「土器로본大伽耶的世界의形成과展開」『伽耶考古学論叢』3（掲載予定）
山尾幸久1989『古代の日朝関係』塙書房

（大学院後期課程学生）